

## 介護予防・生活支援サービス施設「美手」の利用形態と使われ方

—木造民家を活用した通所介護施設と介護予防・生活支援サービスの一体的整備運営 その5—

准会員 ○瀬戸口 佳奈美\*  
 正会員 三島 幸子\*\*  
 正会員 中園 真人\*\*\*

医療法人 通所介護施設 事業概要  
 生活支援 使われ方

## 1. はじめに

その1、2では医療法人社団田町診療所の事業内容を整理し、運営する3通所介護施設の概要について、その3、4では通所介護施設暖家と認知症対応型通所介護施設四縁の使われ方の特徴について論じた。そこで、本論では事業対象者・要支援の高齢者を受け入れる、民家を活用した介護予防・生活支援サービス「美手」の短時間型デイサービス利用者の基本属性を整理した上で、短時間型デイサービスに加えて特徴的な取り組みである体・心・食サロンの施設の使われ方調査結果をもとに、活動プログラムと場面転換の分析を行い、美手の使われ方の特徴を明らかにすることを目的としている。

調査は第1に、利用者の基本属性及び利用形態を明らかにするため、施設に対し利用者に関するアンケート調査を行った。調査項目は、利用者の性別・年齢・介護度・利用頻度、居住地域である。第2に、3施設での利用者・職員の行動観察調査を行った。行動観察調査は終日5分間隔で行為の場と内容の記録及び写真撮影を行った。調査期間は2018年6月11,23日,7月14日,10月13日,11月24日である。

## 2. 短時間型デイサービスの施設の利用形態

## 2.1 施設利用圏

施設と利用者居住地の直線距離を用いて算出した施設利用圏を図1に示す。利用登録者数は35名で、50%利用圏は約1.8km、80%利用圏は約3.8kmと比較的狭い<sup>注1)</sup>。これは施設が萩市の中心市街地に立地しており、周辺からの利用者が多く、また、旧萩市区域を通常の実施区域としているためである。一方、施設から7kmほどある福井や、大井からといった遠方の利用もみられる。

## 2.2 利用者の基本属性と利用形態

利用登録者の基本属性と利用形態を図2に示す。基本属性について、性別は女性のみである。年齢は85~89歳が約4割と最も多く、次いで80~84歳が約3割を占めており、80代の利用者が多い。介護度は事業対象者が6割と多いのが特徴である。

利用形態について、利用回数は週1回が最も多く86%

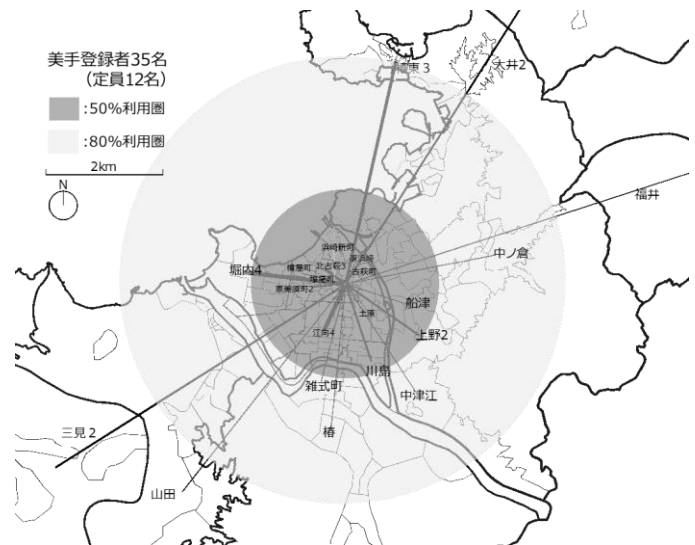


図1 施設利用圏

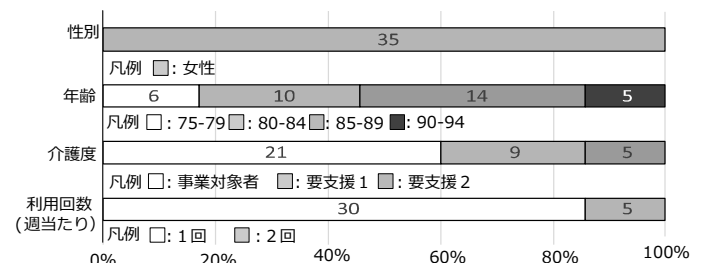


図2 利用者の基本属性と利用形態

にもなり、多くても週2回と利用回数は少ない。入浴サービスは提供していない。

## 2.3 調査期間中の職員の役割分担と利用者属性

職員は主に2名で対応するが、午前中はボランティア、送迎専門の職員、午後からは診療所の作業療法士が入替わりで3名が担当している。送迎は送迎車2台で2名の職員が担当し、利用者が多い日は2回に分けるか、暖家と共同で行う時もある。

午前の部、午後の部の各平均利用者数は6-7名であるが最少4名、最多で11名と差がある。利用者の半数以上が事業対象者である。調査日は午前の部に事業対象者4名、要支援1,2が各2名で、午後の部は1名欠席で、事業対象者3名であった。



図3 1日の生活プログラム



図4 送迎(迎え)・バイタルチェック、体操

### 3. 短時間型デイサービス時の施設の使われ方

最初に、平日に行われる短時間型デイサービス時の使われ方をみていく。

#### 3.1 一日の生活プログラム

調査日の短時間型デイサービスの1日の生活プログラムを図3に示す。送迎(迎え)は9:30から始まり、30分ほどで1台目の送迎車が到着し、来所した利用者からバイタルチェックが行われる。10:30から座位体操に移る。11:00にお茶の時間があり、その後手作業が行われる。11:40から食事準備となり、利用者は口腔体操を行う。12:00頃に準備ができ次第昼食をとり、12:40を目安に片付け帰り支度をし、13:00には送迎が行われ、午前の部が終了する。午前の部の食事中に午後の部の迎えをしており、午前の利用者と入れ替わりで13時ごろに午後の利用者が来所し、バイタルチェックを行う。作業療法士が来て13:20には体操が始まり、途中ヨガなども行う。少し休憩をとると14:25から歩行レクリエーションをし、20分ほどで手作業に移る。この日は漢字の勉強が行われた。15:30からは再び体操となり、主に転倒予防の体操を行い、16:10には片付け、送迎となり午後の部が終了する。午後の部では学校のように算数、体育(体操)、国語等時間割が決められており、それに沿ってプログラムが進行している点の特徴である。

本論では調査の許可が得られた6/11の1日の流れをみていく。

#### 3.2 送迎(迎え)・バイタルチェック、体操

送迎(迎え)・バイタルチェック、体操の場面を図4に示す。送迎車が到着すると、待機職員が出迎え席に誘導する。玄関の段差が大きいので、イスや踏み台、手すりを設ける工夫がなされている。到着した利用者からバイタルチェックを行う。

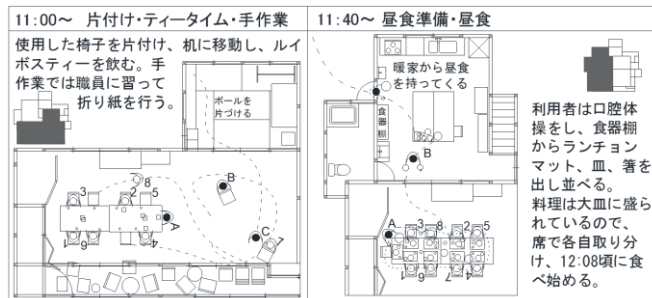


図5 片付け・手作業、昼食準備・昼食

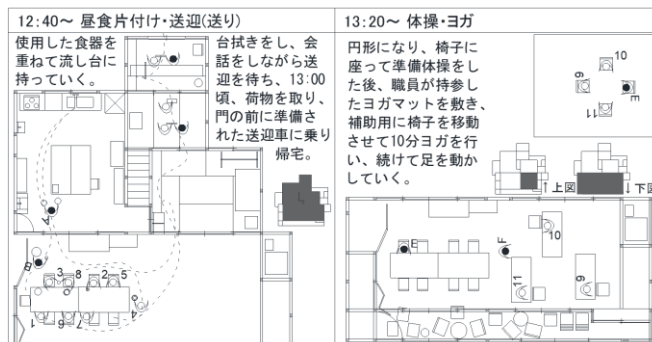


図6 昼食片付け・送迎(送り)、体操・ヨガ

その後、体操に移行するため、机の隣のスペースに縁側に置いていた椅子を並べる。準備を手伝う利用者も1名みられた。体操は最初に準備体操、次にボールを使用した体操、転倒予防の体操を行う。

#### 3.3 片付け・手作業、昼食準備・昼食

片付け・手作業、昼食準備・昼食の場面を図5に示す。体操終了後、利用者はそれぞれで椅子を片付ける。机に移動してお茶を飲む。日によって飲み物の種類は変わるが、この日はルイボスティーを飲んでいった。その間に職員は手作業に使用する備品を準備する。この日は折り紙が行われ、職員が利用者に折り方を教えながら傘を作っていた。

11:40には折り紙を回収し、片付けて昼食準備を行う。職員が隣の暖家から昼食を取りに行く間、もう1名の職員が先導し口腔体操を行う。昼食はバイキング形式であり、体操終了後、利用者は職員と一緒に昼食に使用する食器やお箸を並べる。料理が届くと、各自好きな量を取り、大皿を回していく。盛り付けが終わると食べ始める。職員1名は利用者と共に食事をする。

#### 3.4 昼食片付け・送迎(送り)

昼食片付け・送迎(送り)、午後の部の体操・ヨガの場面を図6に示す。食べ終えた利用者同士で食器を重ねて数名でキッチンの流し台へ運び、手の空いている利用者は台拭きを行う。この日は誕生日が近い利用者がいたため、片付け終了後、歌を歌ってお祝いをしていた。13:00に送迎車が出発するため、それに合わせて出る。午前の部は終了する。

#### 3.5 午後の部の体操・ヨガ

午前の部の利用者と入れ違いで午後の部の利用者が到

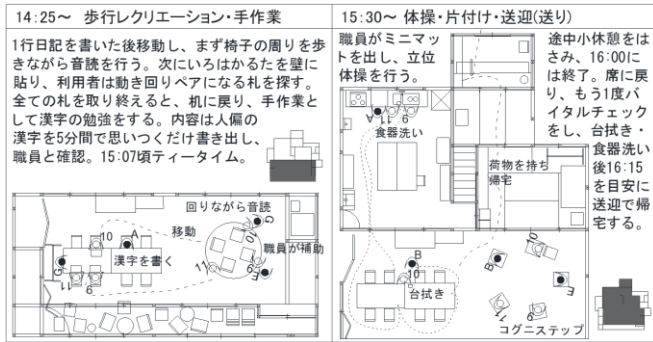


図7 歩行レクリエーション・手作業、体操・送迎

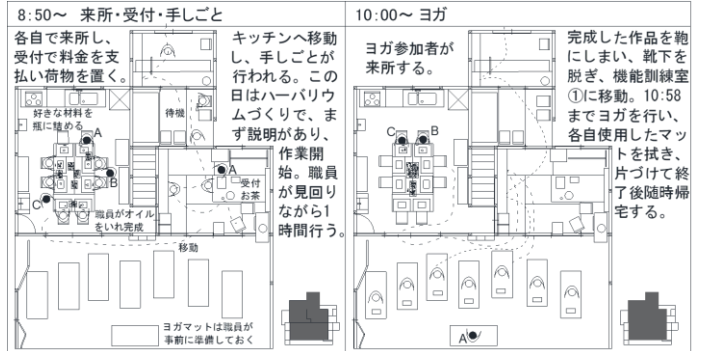


図8 来所・受付・手しごと、ヨガ

表1 体・心・食サロン利用者の利用形態

利用者	6/23(土)	7/14(土)	10/13(土)	11/24(土)
	9,10,11	10,11,12	10,11,12	10,11(時)
1	○●	□	■▲	●
2	○●	□■▲	□△	●
3	○●	□△	□	●
4	○●	□△	□■▲	●
5	○●	□△	□△	●
6	○●	□■▲	□△	●
7	●	□■▲	□△	●
8	●	□	□	●
9	●	□△	□△	●
10		□△	□△	●
11		□△	□△	

凡例 ○：手仕事 ●：ヨガ □：ピラティス ■：クッキング ▲：ランチ

着し、バイタルチェックを行う。その間に作業療法士が来所して体操の準備を行う。また、ボランティアの方も来所して食器を洗い 13:35 頃帰宅する。体操は作業療法士が中心となり、座位体操、ヨガ、寝た状態で足の体操、立位体操と全身を動かす内容で行われた。終了後、職員はマットを片付ける。

### 3.6 歩行レクリエーション・手作業、体操・送迎

歩行レクリエーション・手作業、体操・送迎(送り)の場面を図7に示す。体操終了後は机で休憩をし、記憶想起として1行日記を記入する。その間に職員は椅子を円形に並べておき、歩行レクリエーションに移る。居室のいろいろな場所に貼ってあるいろはかるたを探す内容であり、必要に応じて職員が補助する。カードを探し回ることによって自然と歩行を誘発することができる。終了後、机に戻り、時間割に沿ったプログラム進行に移る。この日は国語で、お題は人偏の漢字で、いくつ書けるかを競うものであった。この他にも算数を用いた脳のトレーニングや、音楽でリズムに合わせて体を動かすなど様々な科目がある。

次に体育の科目として体操に移り、コグニステップ<sup>注2)</sup>が行われた。手拍子に合わせて、職員が前後左右の4方向をランダムに指示し、その方向にステップするものであった。体操が終わると再び席につき、帰る準備を行い、16:15を目安に送迎が行われ、午後の部が終了する。

以上のように、機能訓練室①を2つの空間に分けるこ

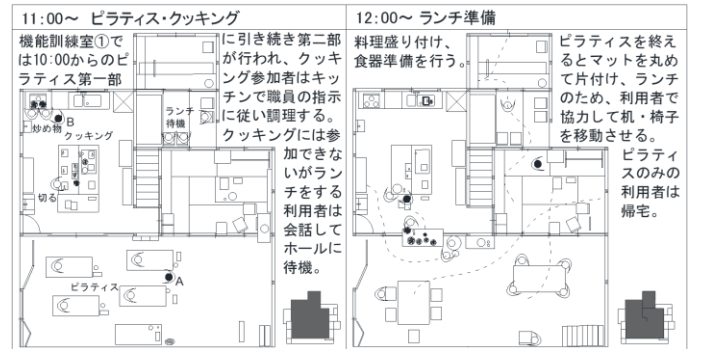


図9 ピラティス・クッキング、ランチ準備

とで、準備始末行為が円滑に行えている。また、介護度の低い利用者が多いため、体操や脳トレーニング等の体や頭を使った機能訓練が主に行われており、時間割を決める等の工夫もみられた。

### 4. 体・心・食サロンの参加者の利用形態

体・心・食サロン参加者の利用形態を表1に示す。利用者は手しごとの参加者が6名、ヨガ・ピラティスは第1部・第2部に分かれ、参加者は各2-7名と差がみられる。クッキング参加者は2-3名と少ないが、ランチはヨガ・ピラティス第2部から来た利用者も参加するため、10名前後となる。このサロンは誰でも参加可能であり、診療所にお世話になった人や、口コミ・ホームページを見た人が集まっている。

### 5. 体・心・食サロン時の施設の使われ方

次に特徴的な活動である毎週土曜日に行われる体・心・食サロン時の使われ方をみていく。

#### 5.1 一日のプログラム

体・心・食サロンの一日のプログラムは週によって異なるが、手しごとがある日のみ9:00から、その他は10:00から開始される。参加者は開始の約10分前から各自で来所し、受付で料金を支払う。手仕事はキッチンで行われ、説明を受けた後作業に移る。完成したら片付けをし、ヨガ又はピラティス参加者は機能訓練室①に移動し、手仕事のみの利用者は帰宅する。ヨガ・ピラティスは10:00からの第1部と11:00からの第2部に分かれ



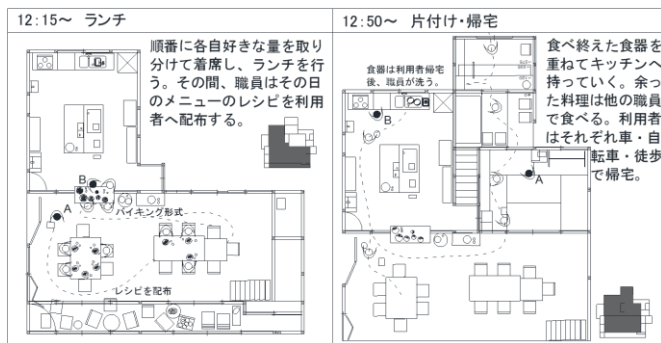


図 10 ランチ、片付け・帰宅

ており、クッキングがある週は第 2 部と同時刻に行われる。ランチはクッキング後の 12:00 を目安に食べ始め、13:00 までには片付けをし、各自で帰宅する。本論では手仕事、ヨガが行われた 6/23 とピラティス、クッキング、ランチが行われた 7/14 の 1 日の流れをみていく。

### 5.2 手しごと、ヨガ

来所・受付・手しごと、ヨガの場面を図 8 に示す。参加者は各自開始時間までに来所し、早く着いた参加者はホールや機能訓練室②に用意してある椅子に座って待機する。職員が機能訓練室②で受付を開始すると、利用者は参加内容に合わせた料金を払い、キッチンに移動して手しごとを行う。外部講師が担当して、全体の説明後、作業を行う。この日はバーバリウムづくりが行われた。手しごと中は集中するため、特に席移動はなく、講師や職員が見回りを行うのみである。完成した作品は持ち帰るため各自機能訓練室②で荷物をまとめ、ヨガに移る。ヨガは呼吸とストレッチに重点をおきながら筋肉を強化するもので、田町診療所の作業療法士が担当する。マット上で行われ、利用者のレベルに合わせて進めていく。終了後、使用したマットを拭いて第 1 部は終了し、参加者は帰宅する。その間に第 2 部の参加者が来所し、第 1 部と同様の流れで行われる。

### 5.3 ピラティス・クッキング、ランチ準備

ピラティス・クッキング、ランチ準備の場面を図 9 に示す。ピラティスもヨガと同様に第 1 部と第 2 部に分けて同様の流れで行われる。ピラティスは、正しい骨格を意識しながら、体幹の筋肉を整えるもので、ヨガよりも行いやすい。クッキングは第 1 部のピラティス終了後、第 1 部参加者の内数名がキッチンに移動し、エプロン、三角巾、マスク、ビニール手袋をつけて行われた。週によってメニューは変わるが、この日は夏バテ予防のメニューであった。クッキングと同時並行で機能訓練室①ではピラティスの第 2 部が行われていた。終了後ランチの準備に移り、機能訓練室②に置いていた机・椅子を移動させる。作った料理を大皿に盛りつけ、机をキッチンと機能訓練室①の真ん中におき、その上に料理を並べる。

### 5.4 ランチ、片付け・帰宅

ランチ、片付け・帰宅の場面を図 10 に示す。ランチはバイキング形式で取り、各自盛り付けて食べ始める。クッキングに参加していなくても利用でき、血糖値を下げるレシピや夏の食欲増進レシピ、筋肉量を増やすレシピなど、毎回健康な体をつくるメニューのレシピがもらえることから、参加者は多い。食べ終わったら食器を協力して片づけ、終了後各自で帰宅する。

## 6. まとめ

- 1) 短時間型デイサービスの施設利用圏は 50%が 1.8km と狭く、萩市中心市街地からの利用者が多い。利用者属性は全員女性で、85 歳以上の利用者が半数以上を占め、年齢層が高い。介護度は事業対象者が中心で、利用回数は週 1 回の利用者が多い。
- 2) 利用者が 1 日の大半を過ごす機能訓練室①の広さは十分にあり、机を置く居間的なスペースと体操など多目的スペースの 2 つの空間に分けることで準備始末行為が円滑に行われ、移動による場面転換を行っていた。一方、収納が少ないため縁側に椅子を置いている。体操時に使用する椅子や道具が多く、頻りに準備や片付けを行っていた。
- 3) 短時間型デイサービスでは、認知症予防のための頭の体操や体を動かす内容が多く、診療所の作業療法士が直接指導にあたることで、短時間でも内容の濃いサービスにすることができている。
- 4) 体・心・食サロンは、毎週ヨガやピラティスでリラックス効果や、正しい身体の使い方の意識につながり、クッキング・ランチでは内側から健康的な体を作ること意識でき、手しごとは普段づかいのものを作りながら、手の感覚や嗅覚を刺激できるなど、医療法人運営施設ならではの体のことを考えた内容で、かつ楽しみながらコミュニティも築ける点で評価できる。

## 注

- 1) 既往研究<sup>1)</sup>によれば、旧萩市内に位置する通所介護施設の利用圏の平均は 50%利用圏が 2.4km、80%利用圏が 4.1km である。
- 2) コグニステップはコグニサイズの 1 種であり、コグニサイズとは国立長寿医療研究センターが開発した運動と認知課題を組み合わせた、認知症予防を目的とした取り組みの総称を表した造語。英語の cognition (認知) と exercise (運動) を組み合わせて cognicise (コグニサイズ) と言う。運動の種類によってコグニダンス、コグニウォーキング、コグニバイクなど、多様な類似語がある。

## 参考文献

- 1) 三島幸子他 4 名：社会福祉事業団による高齢者通所介護施設の整備プロセスと利用特性，日本建築学会計画系論文集，第 82 巻，第 732 号，pp.353-361，2017.2

\* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

\*\* 島根大学学術研究院環境システム科学系 助教・博士(工学)

\*\*\* 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

\* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

\*\* Assistant Prof., Institute of Science of Environmental Systems, Shimane Univ., Dr. Eng.

\*\*\* Professor, Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.